# 地理学の本質

宮川善造

【要約】 地理学をもつて区域的科学及び統合的科学とみなすハーツホーンなどの説は、たしかに近代地理学の有力な思潮に棹すものではあるが、それは研究方法からの一面的考察を強調した結果であつて、地理学の本質を全面的に把握した主張とはいえない。これに対して地理学の研究対境を人間生活の場所としての土地と限定すれば、その対境面からして地理学を土地科学及び場所科学とする提唱が可能になつてくる。かくして現代の地理学界においては、地理学の対境と方法とを通して考え合せれば、その本質を土地的区域科学及び場所的統合科学というのが妥当であろう。かような本質を十分に具えた地理学の中軸的部門はいま形成の過程にあるわけで、この新たな酒を盛るためには、地理学のもつ近代的体系にも一大変革が加えられねばならない。

## 一　現代における本質論の問題

地理学のもつ根本性質如何ということについては、いやしくも斯学の研究に携わるほどのものは、何びとも関心をもたぬものはあるまい。まして地理学の名付け親であり、始めてこれを古代科学の列に加えたエラトステネスの場合には、真剣にこの問題と取り組んだであろう。[1] このことは十七世紀の半ばにいたつて地理学の復興を計り、これを近代科学として再建したウァレーニウスの例でも同様であつて、その様相は彼の遺した『一般地理学』の内容や体系からも推察されるところである。[2] したがつて地理学界における本質論の起源は、科学的地理学の成立と共に早期に求められようが、実際にこれを表面にとりあげて、本格的な意見の発表を行つた人としては、やはり哲学者のカントを最初に挙げねばならない。

カントの地理学に関する講義は、[3] 一七五六年から四十年

の長きにわたつて繰り返されたもので、その間ヘルダーなど多数の学生に与えた感銘には深く大きなものがあつた。[4] もつとも彼の自然地理学の内容は、その後における学問の進歩によつて、今日では僅かに学史的興味を喚び起す程度のものとなり終つたけれども、その序説に含まれる卓越した原論的見解は、出版された講義録を通して、長くドイツ地理学者の力強い背骨となつたのである。すなわち近代地理学の祖と謳われるフンボルトやリッターにしても、カントの思想には著しい影響をうけていたし、ヘットナーが一九二七年にまとめあげた「地理学、その歴史、その本質及びその方法」[5]は、全くカントの学説を根幹として展開したものであることは疑いない。そしてこのヘットナーの本質論はドイツ国内を始め、欧米諸国の学界に多くの共鳴者を得るに至り、特にアメリカのハーツホーンは深くそれに傾倒して、自ら『地理学の性質』[6]なる大著をものした。

かように地理学の本質論がカントの先駆的な学説によつて具体的な発展をみせたのは、十八世紀の後半からであるが、地理学界においてこの問題に関する論議が盛んにたたかわされるようになつたのは、それよりもかなり遅れている。それは十九世紀の半ばにおける近代地理学の定礎期を経て、同世紀の末から二十世紀の初頭にわたるその確立期に入つた頃に現われており、ヘットナーの論文が多く発表されたのもこの時期である。[7] 彼はカントに従つて地理学をば空間的観点によつて実在の断面をとらえる空間科学の一つとみなし、とくに地表の区域的差異に関心をもつ区域的科学[8]であると主張した。この地域科学派或は地誌学派と呼ばれるものの考え方は、当時の学界における主要な思潮の一つであつて、シュリューターのように、地域の内的性質よりはその外的景観に主眼をおく点からヘットナーと対立したものでも、[9] やはり究極的にはこの学派の見解から外れていたわけではない。

これに対する他の有力な学派は、地理学をもつて法則定立的な科学、とくに地人相関理法の探究に関心をもつ通論的科学とみるもので、その中にはラッチェルの流れをくむ環境決定論者から、[10] バローズなどのように人間生態学としての地理学[11]を主張するものが含まれている。この通論学派と地誌学派との間では、一方は地表全般に通ずる普遍的な地人理論の追求を強調し、他方は地表構成の諸地域の特性

把握に力点をおくので、背後に横わる科学論の対立と相まつて激しい論争が続けられた。しかしながら長い地理学の発達史をみても、この二つの異る見解は一つの地理学における研究方法の両面を示すものに過ぎないので、論争の間からおのずから歩み寄りがみられるようになつたのである。ハーツホーンの見解もかような方向にそうて立てられたもので、元来ヘットナーの直系に当る彼は、地域科学派への偏りをもちながらも、なおよく通論学派の主張を摂容しつつ、近代地理学の統一を達成しようと努めている。

かくして現代における本質論の躍進を計るためには、ハーツホーンの著述は力強い跳板をなすものといえるわけで、ここでは通論学派の批判を他の機会に譲り、まず彼の所論の検討から始めてみよう。ハーツホーンの著した『地理学の性質』は一九三〇年代の末にまとめあげられたもので、その後たびたび増補され、版も重ねているが、その論旨においてはいささかの変更もない。いまその第四刷（一九五一年版）に掲げられた終章の結論から、さらにその骨子を要約してみれば、次の三点があげられよう。

（一）地理学はコログラフィ的（区域的）科学である。[12] それは実在の時間的断面を考察する歴史的諸学とならんで、実在の空間的断面を研究する区域的諸学の一つに属する。区域的科学の中でも地理学は特に地球表面すなわち世界の空間的断面について、その地域的差異を記述し解釈しようとする。この研究領域は多くの系統科学の領域と平行するものではなく、それと交叉的関係をもち、それ故に独自なものといえる。

（二）地理学は統合的科学である。[13] 地理学者が関心をもつ地表の地域的差異は、異質的諸現象の相関と結合とによつて形成されるもので、地理学はそれらの個々の現象についての系統科学の知識を寄せ集めるのではなしに、区域的観点に従つてそれらを統合的に研究するのである。この点からしても地理学は系統科学とは軌を同じくせず、むしろ統合科学としては歴史学にならぶものといえる。

（三）系統地理学と地域地理学とは、[14] 地理学のもつ一つの目的を達成するための二つの方法を代表するものである。斯学の目的は地表の地域的差異を明かにするにあり、そのために系統地理学は各種の現象の地域的差異とその相互関係とを支配する法則を理解しようとし、これに対して地域

地理学は全地表をユニークな諸地域に分割し、各地域における現象間の相関、結合及び地域性を把握しようとする。地理学の完全な発達を期するには、この二つの方面からの研究は常に連関を保つて進められねばならない。

上に述べたようにハーツホーンは、地理学の本質をば地表の地域的差異を研究する区域的・統合的科学として、これを一般の系統科学から区別し、それに基いて対外的には科学分類上の地理学の位置を明かにし、また対内的には系統地理学と地域地理学との二元性を克服しようとした。しかも彼は自説の正当性を固めるために、斯学の発展過程に照して証拠をあげ、かつ学界における異論への反駁をも加えたのである。したがつてこれまで地理学の科学性の曖昧さに対して投げられた疑問や、その内部に抱かれて来た二元的分裂の悩みは、これによつて多分に解消される運びとなつたといえよう。たしかに最近における本質論議の平穏状態については、彼の学説が一つの有効な鎮静剤の作用を発揮したことは疑いないが、さりとて現代地理学の新建設が問題なしにそれを堅固な基礎として築き上げ得るであろうか。

これに関する問題の第一は、地理学を区域科学というのはその所属グループの性格を指摘したものにすぎず、区域科学の中における地理学の特質については更に何らかの明示が必要になるという点である。もちろん彼の場合には地球表面或は世界の空間的断面の研究という但し書きがついているけれども、この研究対境の説明が甚だしく物足らない。同義語に用いられているこの二つが土地を指すのか社会を意味するのか、或はまたその両者を含むのかという弁別は、世界社会や地域社会の研究が社会学の手にある今日、地理学にとつては必須のことがらといわねばならない。また地表の地域的差異に焦点をおくことは肯けるとしても、それを強調するあまり、大小の多様な地域によつて構成される、全地表そのものの成立についての関心が薄いのは如何なものであろうか。これにはカントが地域の研究をコログラフィアと言い、地表の研究をゲオグラフィアと呼んで使い分けしたことが想起されねばならない。

次に第二の統合科学という性格もまた同様に所属グループ共通のものであつて、地理学特有のものではない。したがつて地域的観方による諸現象の統合という註釈が加えら

れるわけであるが、地域構成の諸事象が相関・連結以上に統合することについては、研究者による任意の統合でない限り、地域中核力の統合作用或は地域主体力の統合作用があげられねばなるまい。また場所的統合という文字も彼の著書には散見するが、その場所概念は地表における異る所在というだけで、生活主体を通して把握された主客総体的意味概念とはなつていない。もちろん客観的態度の護持を信条とする近代科学に対して、研究者の主観をもち出すことは進歩の方向へ逆行することとなるが、それとは異つて地域に立脚する実際の生活者の主体性を把握すべしと主張するのは、むしろ現代科学への躍進のための拍車となろう。

第三の問題は地理学における二元的分裂傾向の統一は誰しも望むところではあつても、真の統一が地理学のいかなる部門において達成されるかという点である。系統地理学と地域地理学との二大部門が、それぞれに相手の研究に関連をもち、またその成果を利用するだけで、果して二元的地理学の統一が得られるであろうか。それよりはむしろこれらの両部門を超越しつつ摂客する本幹的部門を新たに必要とするのではないかという疑問が抱かれる。またこれに伴つて理論研究の方面でも、特定の現象が地表にわたつて地域差を表わす理由や、それが各地域で他の現象と相関する理由を論ずるだけでなく、現実の生活場所としての土地が成立する事実を具体的に説明する理論とか、大小の諸地域によつて全地表が構成されている空間的秩序の理論が問題となつて来よう。

今日の地理学は古代科学の伝統を若干残しているとはいうものの、それが近代華やかな時に再建されただけに、その中に浸みこんだ近代科学的色彩はすこぶる濃厚である。したがつて現代科学としての地理学を樹立するためには、この時代思想への反省が大いに必要となつてくるわけで、これは、ハーツホーンの学説に対する批判の場合もその例外ではない。次にこの点を考慮しつつ、土地科学と場所科学という問題から地理学の本質論を展開し、さらにその本質を内容とする本体の論議に及びたいと思う。

## 二　土地科学としての地理学

地理学の本質を区域的科学とする学説の根底には、斯学の自立が特別な対象の故にではなく、独自な方法の故に可

能であるという考え方が強く横わつている。たしかに空間的・区域的方法は、地理学にとつては全く固有な、かつ不可欠な方法であるけれども、ひろく科学界を見渡せば、それを地理学のみが専用するものとはいえない。それはあたかも時間的・世代的方法が歴史学のみに限られていないのと同様であろう。特定の単一な事象を取り扱う系統科学でも、比較的複合性の強い事象を問題とする人類学や社会学でも、理論研究の前に事実の把握を必要とし、その際世代的方法や区域的方法を用いて対境の存在を考察するのが普通である。[16] さらに歴史学が実在の時間的断面を研究する世代的科学に属するとはいつても、国家史や世界史の場合には、集団生活の発展を知るために当然空間的方法を併用せざるを得ない。また逆に地理学が地表或は世界の空間的断面を扱うとしても、その形成過程を顧ることなしには、現在の事実を理解し難いので、いわゆる歴史地理学的研究を包含しているわけである。

かように空間的方法は諸科学の間にかなり広く用いられるものであるから、空間科学或は区域科学という称呼は、研究上にこの方法を特に重要とする科学群という意味では認められもしよう。しかし諸科学は方法によつて独立するという議論はまた別であつて、これについてはヘットナーを始め多くの地理学者に影響を与えた西南ドイツ派の科学論が特にとりあげられねばならない。すなわち十九世紀の末から二十世紀の初めにかけて唱えられたこの学派の主張は、[16] 従来の科学分類が自然科学と精神科学との区別を対象によつて行つていたのに反対し、ひとしく精神をとり扱うものでも、法則定立的方法によるものは自然科学であり、個性記述的方法を用いるものは文化科学とすべきであるというのである。これは方法の独自性をもつて文化科学の存立を基礎づけた点に時代思潮としての意義が大きく、文化科学の代表にあげられた歴史学はもちろんのこと、人文地理学や地誌学の研究に携わる学者にも、その科学的根拠をここに見出そうとするものが少くなかつた。[17] しかしながらかりにこの学派の立場に同ずるとしても、文化科学的方法が適用できるのは、対象が目的——成績の系列による意志活動をなすからであつて、それが原因——結果の系列をとる自然運動をなす場合には、当然自然科学的方法が適用されねばならない。したがつて二つの方法の差別性と適用性

とをつきつめてゆけば、心理現象にしても社会現象にしても、対象のもつ相異る二面にゆき当ることになろう。

およそ直観によつて得られるわれわれの生（ナマ）の智識は、対象と方法との未分状態に発するもので、それが反省的段階に進んで両者の二分となるのであるから、科学的研究においては対象と方法とが常に正応することが肝腎である。それ故に地理学の研究に区域的方法がその枢軸として用いられるのは、対面する複合的事象がまたそれに応じた空間的拡がりと区域的特性とを有するのによるといわねばならない。地理学においてはこれまでも特定の単一な現象が取り扱われたことはあるが、それは現象の種類によるわけではなく、むしろその在り方の故に問題となつていたのである。たとえば空間的な分布や拡がりを示すもの、或は土地との相関を現わすものがそれである。[18] しかしながら植物分布の現象が地理学よりはむしろ植物学の研究領域に編入されるように、単一事象の研究は次第にそれぞれの系統科学に所属するようになつてしまい、ここに地理学は種々の事象が相関し複合する状態を問題とするというところへ落付いていつた。もとより異質現象の結合状態といつても、地理学の研究するのはその中のある一定の状態、すなわち空間的拡がりにおける状態である。カントはつとにこの点を指摘して、実在の空間的断面を扱う科学の中に地理学を位置させたのであつて、しかもその空間的断面にさらに限定を加え、天文学の対面する天界と、地理学の相手とする地表とを区別している。

カントの思想を継承したハーツホーンも、地理学研究の対境（単一事象をも、複合事象をもさす術語として以下用いることにする）として世界の空間的断面すなわち地表というものをあげているのであるが、これは地球表面に展開した実在の断面としては理解されても、それが現代科学に列する地理学の対境限定として十分な定義とはいえない。なんとなれば、今日は系統科学と地理学との差別、歴史学と地理学との異同を明確にするだけでなく、人類学や社会学と地理学との弁別も要求されているからである。地表に立脚する人類集団を人類学が、また世界社会を社会学が、それぞれに対境とし、しかもその空間的形態をも含めて研究を進めている際に、地理学が漠然とした地球表面或は世界の空間的断面という概念をもち出しても、ひろく学界の承認を

得るには至らないであろう。したがつて地理学の対境については、さらに新たな限定が必要となつてくるわけである。

さてハーツホーンは地理学がこれまで区域的科学として発展して来たことを、その学史的過程を通して証明しようと努めたが、地理学は古代ギリシアにおいてその名を与えられてから、常に土地を対境とする科学であつたということも、地理学史の一面として見逃すことはできない。もつともこの土地という概念は遊星的地球とか自然的地表とかに限られたものではなく、その上に人間の生活が営まれている具体的な土地としてうけとられていたものである。たとえば地球の位置・形状・大さなどの数理地理学的研究に力を傾けたエラトステネスでさえも、その地理書にはエクメネとしての海陸の形態や、各地の住民及び産業などを内容に盛り上げていた。これは地理学の研究領域を全地球ではなしに、地球表面に限定したカントの場合でも同様であり、また地理学の対境を地表及びそれと因果的相互関係に立つ諸現象と定義したリヒトホーフェンの例でも変りはない。[19] したがつてゲルランドが地理学を遊星的地球の科学にしようと主張したり、ペツンェルが地理学の対境から人間的要素を除去しようと提唱[20]しても、学界の大勢はそれによつて動かされることはなかつた。実際に、天文学・地球物理学・地質学・海洋学・気象学など地球又は地表に関する自然科学の発達からしても、これらの偏向的見解に追髄する必要はなかつたわけである。

かように地理学は広義の土地をその研究対境として持続して来たことは明かであるが、いま現代科学の中に伍する地理学としては、地表及びその上に立つ人間生活という概念をさらに絞つて明確に焦点を合わせる必要があるといえる。すなわち研究の焦点をそれぞれ人類或は社会におく人類学や社会学に対して、地理学は究極の対境を土地そのものにおかねばならない。もちろんこの場合の土地は、人間から切り離された地物をさすのではなく、人間生活に包まれた土地を意味するものであり、ただ研究の当初及び結末において対面すべきものが、人間そのものでなく、物的存在たる土地そのものであるという考えに基く。ハーツホーンが地理学の研究する究極的な唯一の対境は地表又は世界の空間的断面というのに比べて、この考え方はさらに厳しく第一次的対境を土地そのものに限定したわけである。こ

のような主張に対しては地理学の研究範囲を物的存在に狭めてしまうという非難が起るであろうが、それは当を得たものではない。人間生活の場所となつている土地の成立を究明するには、当然第二次的対境たる人類・社会生活や人間の心的活動力や純粋の自然的営力にまで溯る必要があるからである。

かくして地理学の対境を人間生活の場所としての土地と定義し、これをかりに人生地境又は単に土地と呼ぶならば、それはわれわれの前においていかなる実体をもち、いかなる在り方をみせているのであろうか。これに関してまず挙げられるのは、土地は自然物及び文化物から形成されている三次元的存在の物体であつて、その表面には自然景観及び文化景観といわれる可視的形態を示し、[20] その内部には種々の要素による組成と大小の部分による構造とをもつ点である。次に指摘されるのは土地が人類生活ないし世界生活の場所として全地表的（global）な一体をなすと共に、邦国から家庭までの大小の集団生活の地域としても実在するという点である。ハーツホーンは地表の全一体的実在を認めながらも、それを区分する広狭の諸地域については、すべて学者の任意な思惟的構成によるものとして強くその実在性を否定し、またこれを生物学的有機体にあてたり、全一的個体とみたりする考え方を極力排斥している。たしかに彼の批判するように、今日の地理学者がとり扱う地域（region）は、研究の際の恣意的設定によるもので、単元としての個体性や有機体としての生命をそれ自体に具えているわけではない。しかしながらさりとて全地表のほかに実在性をもつ土地がないというのは言い過ぎであつて、各生活主体の生活地域を把えてみれば、それぞれに統一性も単元性も具えていることは明かである。もとよりそれは生活地域の中の諸要素や諸要因が、主体力によつて完全な統一体にまとめあげられているという意味ではない。サハラ砂漠に打ち上げられた原爆の塵は地表の各地に流れてゆくように、生活地域を形成する物質や動力には、共通性や普遍力の強いものも多いが、生活体の立場からすれば、それぞれの意志力に応ずる強弱の差はあつても、やはりそれなりに一体性が保持されているというのである。このことは眼を蔽い難い現実なので、ハーンホーンも農地や工場地の例をとつて簡単に触れているけれども、全地表が学者の思惟

的構成としてでなく、実体的にも大小無数の生活地域に分割されている点こそ、地理学の研究に際しては最も重視さるべきものといえよう。

## 三　場所科学としての地理学

地理学が対境とする土地を客体的存在であるというのは、単に研究者の主観から独立する物的存在だというのではない。それよりはむしろ、その土地を生活の場所とする生活体からみての客体という意味が重要である。つまり土地は主客統合体の中から研究の都合上、強いてぬき出した客体的存在なのであつて、この点は小さな家族の生活する屋敷でも、大きな邦国の支配する領土でも変りはない。したがつて三次元的な土地にさらに四次元的に交叉する時間の軸について考える場合でも、地球の内外からくる自然界の変遷の時間のほかに、生活主体を通して働らく歴史的発展の時間が問題となるわけである。自然の時間には最後の氷河期が過ぎ去つてからは激変はなく、その推移も循環的或は周期的変化を含むものとして平静に受けいれられるが、歴史の時間はいまや新たな産業革命を伴う近代末の転換期として、土地の景観や構造にも著しい変革を現わしている。かような変革は生活主体が土地に対して意味付けを行い、その生活目的のために土地を使用する過程を通して起るものであつて、地理学の研究にはこの時間・空間的な土地に加えて、さらに生活主体によつて貫かれた意味の軸をも理解しなければならない。

土地に与えられた意味は、生活体のもつ目的の如何によつて多方面に分れるけれども、地理学の上から解釈すれば、通じてこれを場所的意味ということができよう。場所という言葉はしばしば無主体な物体の所在や運動に関しても用いられるが、生活体の意志によつて汲みとられた味合いをもつて真の意味と解するならば、それは当然に主客統合的な概念でなければならない。したがつて地理学における場所の概念は、生活体が土地の実質とその運動とを内容として、これを生活目的から意味付けたものとなつてくる。実際にはこの場所的意味が必らずしも単純ではなく、かつまた明確に自覚されているともいえないが、研究者の立場からこれを分析してみれば、それは二面の意味の重り合いということができよう。すなわち生活の場としての土地と、

生活の所としての土地という二重の意味合いがそれである。このいわば地場的意味と地所的意味とは、共に同一主体からその生活地境に対して与えられた意味であるけれども、両者のもつ味合の差異はかなり著しい。

地理学ではこれまで土地のもつ意味については、もつぱら場としての意味が強調されて来た。それは環境という概念をもつて代表されていたもので、とくに十九世紀の末期では土地を自然環境として把握し、これがその上に生活する人間をいかに決定するかという環境論が主題となつていた。[22] しかし土地は原初的段階では自然物であつたとしても、人間が長い文化活動を通してその表面に文化景観を造りあげて来たので、今日では土地をそのまま自然というのは十全な表現ではない。これはまた自然界には地表以外に天界も含まれる点からみても同様であつて、土地を環境の一種とみるならば、むしろ土地環境と呼ぶのが適当であろう。また土地はその上に文化景観を具えていても、やはり物的構成体にすぎないので、人間集団及びその文化から成る社会環境とは一応の区別が必要である。かくして生活体と関係をもつ環境の区分と配列とをみれば、個々の生活体の場合は、宇宙環境の下で、土地環境に立ち、社会環境に囲まれながらその生活目的の実現を計りつつあるものといえよう。

次に環境のもつ意味については、物理学や生物学を始め多くの科学によつてそれぞれの立場から多少の差異は認められるが、[23] 地理学においては土地をもつて生活主体を支持し、これに影響を与えるものと価値付けたところに特色がみられる。土地は普通の見方では主体に対して外在する物体であり、かつそれとは別に独立の運動を行うものでありながら、これが生活体系の中に包摂されることによつて、生活の基盤となつてこれを支え、また主体を囲繞してこれに影響を及ぼすものと解釈されてくる。すなわち純自然性の物質を含む土地でも経済目的からは資源地帯として価値を与えられ、また土地が行う無目的な運動も、生活に対する支持・刺戟・阻害・助長などの作用として受けとられるのである。かくして自然のままの土地を素土というならば、生活体との結びつきによつて、素土の観念は風土・産土・郷土などの土地環境観念に変つてゆくことになろう。

地表の景観や作用はどこでも一様というわけではないの

で、かような主体的土地環境も、実際にはその中に景観的特徴や区域的範囲が自覚されているわけで、この点からすれば地表は大小様々の環境的地域に分けられているといえる。[21] もつとも同じグリーンランドに住む生活体でも、ポーラー・エスキモーとアメリカ空軍部隊とでは、極地環境としての意味やその範囲に大差はあるし、これを理解するための方法上の難易も同じではない。低位な生活体の場合と異つて、強度な文化力をもつ主体の場合は、環境への認識や解釈についても、これを客観的な生活資料として発表しているので、研究者もそれを理解するのが容易なわけである。

さて翻つて所としての土地についてみれば、土地のもつ意味には環境という概念では言い現わされない一面があるのに、地理学においては案外にもこの地所的意味が軽視されて来たといえる。それは人間一般或は個人をとつてそれと環境的土地との関係を考察していたからであり、また人間集団をとりあげても、これを因果的運動を起す社会現象として扱つていたからであろう。もし現代国家のような強力な意志活動を行う主体に眼を移せば、当然それが占有する地域やそれが行う土地経営が問題となつてくるはずである。われわれの眼前にはかような所としての地域が夥しく実在するのに、これまでわずかに政治地理学がこれを領土としてとらえ、その境界や構造を論ずるだけであつた。[22] しかしながら環境地域（environmental area）と異る占有地域（territorial area）は、小は家族や部族の生活する土地から、大は国家や同盟の支配する土地に至るまで、さまざまな形態で存在していて、地理学にも環境研究の場合に劣らない程の豊富な材料を提供しているのである。

これらの占有地域すなわち所としての土地は、実際には場としての土地と重なり合つているが、その意味は生活主体を基礎付けそれに影響を与えるというのではなく、逆に生活主体が占有し、それを経営する土地というのを本義とする。いわばそれは縄張りの土地に当り、主体の意志力がその範域に横溢し、その内部に深く注入されてゆく土地をさすのである。したがつて生活体の土地に対する作用も環境の場合のように適応や調整として現われるのではなく、領有・支配・開発・整備などの実践活動として行われることになる。これはわれわれ家族の私有する地所についても

認められるが、人民の共有する共産的国土の例によれば一層よく了解されよう。

次に占有地域の範囲は、これらの私有地や領土においては極めて明確で、線状の境界をもつて示されるものが多い。これに比べて未開民族の住地では一見それが不明なようであつても、仔細に観察すればやはり一定の縄張りが見られよう。たとえばマレー半島のセマング族のように、現存する最も原始的な民族に数えられるものでも、熱帯林の環境の中に、血縁的小群がそれぞれ約二〇平方マイルの領域を占有している。[20] もちろん彼等の文化景観は極めて貧弱で占有地域の特徴を表面に現わしてはいないが、強度の文化力をもつ団体の場合は統一性の顕著な文化景観の配列をつくりあげており、それが同質景観の連続を主とする環境地域と対照的に、地所的意味を深く汲みとらせるのである。

上に述べたように地理学の対境とする土地が場所としての意味を含むということは、研究行程の上からも、事実観察と理論考究との間に意味解釈の段階を必要とすることになる。しかもそのためには研究者がその立場を生活体の立場へ移し、その意志を代入させて行わねばならない。ハーツホーンは地理学的に意味のある現象として選択されるものは、地表の地域的差異に関連あるものに限られるというが、それは学者が研究上にもつ興味の寄せ方であつて、土地に含まれた主体の意味とは別である。この主体的意味を解釈するのは、興味をこえた必須の任務であつて、この過程を経てこそ始めて土地に対して作用する主体の意志力も理解されるわけである。

地表の諸地域は学者の思惟的構成によるものであつても、また実体的な生活地域であつても、ともに地域的差異を有することは、それぞれの地域相互の比較によつて疑いはない。しかし地域の差異のみに関心をもつのは、近代人の趣向とはいえても、研究の上からは一方的に偏つている。なんとなれば土地は差別性をもつと同様に相似性をも持つており、[21] しかもそれらを内包しつつ意志的統一の下に自体的特性を具えているのであつて、土地の性格についてはここにこそ究明さるべき要点があるといえよう。さらに土地の研究に当つては諸地域の特性だけでなく、全地表そのもののもつ特性も問題となる。特に十九世紀の半ばに世界生活が成立してからは、全地表は世界生活の場と所とが合致す

る最大の土地として新たな解釈を迫つて来た。

土地のもつ性格はかように考えると単純ではないが、それはさらに土地に関する要素や要因の多様さによつて一層その複雑性を増している。ハーツホーンが地理学の本質を統合科学としたように、地理学はやはり異質的な現象の相関や連結を考察しなければならない。これは対境を土地と限定しても同様であるが、統合的研究というならば、単に空間的・区域的断面においてそれらを扱うというだけでは十分ではない。土地は場所的意味を含み、主体の意志力によつて統合されているのであるから、要素や要因の連結も、生活体の活動を軸とし、場所の結合を通して、主客綜観的な方法で研究されねばならない。

## 四　地理学の本質と本体

地理学の本質如何という問題について、これを区域科学及び統合科学となすハーツホーンの解答は、たしかに地理学の所属する科学グループの性格を示すものではあるが、地理学の独自な性質を究明する上にはなお十分な解決を与えたものとはいえない。それはさきに論じたように、研究の方法を通して斯学の本質を見定めようとする考えに基くものであつて、さらに現実の研究対境を限定してゆけば、そこから土地科学、場所科学という主張が成り立つてくる。もとより地理学を地の学という説は古代から唱えられ、また場所の科学という点も二〇世紀初頭にすでにラ　ブーシュの指摘したところであるから、[25] かような提唱は表現としては特に新味があるわけではない。しかしながら無主体の地表及びその諸地域や客観的な場所とは異つて、生活主体の場所となつている現実の土地に考察の焦点を合せ、これを主客綜観的に研究しようとするところが、現代地理学としての問題となり得る点である。かくして地理学の本質をその対境と方法との両面からつきつめてゆけば、土地的区域科学であり、かつまた場所的統合科学であるということができる。しかし斯学の本質に関する論議はなお研究の任務についても起つて来よう。

およそ科学の任務は事実の認知と理由の論究とを行う観照的研究にのみ存するというのが近代科学者の通見であるから、方策の検討と規範の探究とを目的とする実践的研究をば科学の圏外とみなすものの多いのも当然のことである。

地理学においては地政学の勃興を契機として第二次大戦前にこの問題は盛んに論議され、政策研究は非科学的なものとして排斥をうけた。これについては別に詳論してあるのでここでは省き[29]、ただ国土建設や地域計画に関する実践的研究の促進も現代地理学の一課題であるというに止めておこう。次に地理学を観照的科学と一応しても、その本質が事実の記述にあるのか、理法の定立にあるのかという論争が暫らく続いたことがある。しかしどの科学でも事記と理論とは研究行程の二段階をなすものなので、西南ドイツ派の文化科学説に触発したこの議論もいまは下火になつた。もつともこれについてはハーツホーンの考えるように地表の地域的差異への関心を中心として、従来の通論的方法と地誌的方法との妥協を計るというのでは、まだ満足な解決を得たものとはいえない。なんとなれば現代地理学者の関心は、場所的土地としての実体的な地表や地域に向けられているから、事記についても主客的・統合的な方法がいるし、理論の点でも具体的・統合的な理論が求められるからである。

地理学の本質を右のように要約するときに、次に起る問題はこの本質がいかなる実体に盛られるかということである。地理学の実体は大小の諸部門の体系によつて構成されるが、これについて一般地理学と特殊地理学という二大部門の分立をもつて基本的体系とすべきであると唱えたのは、かのウァレーニウスであつた。その後今日まで約三〇〇余年の間、地理学はこの体系を崩すことなく、専らその内部において第二次部門、第三次部門を分化させて来たのである。すなわち一般地理学からは自然地理学と人文地理学とが分れ、さらにそれぞれの中から地形学・氣候学・生物地理学、或は居住地理学・経済地理学・政治地理学その他が派出し、また特殊地理学からは大陸地誌と各国地誌とが分派した。近代地理学の発展は実は分析的研究によるかような諸部門への分化にあつたもので、したがつてその本体論もまたこれらの分派的部門を基礎として行われたわけである。

地理学の任務が理論的研究にあり、それ故に本質上それが理論科学に所属すると考える通論学派は、一般地理学をもつて地理学を代表する本体的部門と主張する。この学派の中でも自然地理学が先駆的発展を示した初期には、これ

をもつて地理学を代表させたが、人文地理学が著しい成長をみせた後期になると、これこそ地理学の本体に違いないと力説した。これに対して地誌学派は地理学の本質を個性的地域の総括的叙述にあるとみなすので、単一事象の系統的・通論的研究を行う一般地理学は、むしろ地理学を離れてそれぞれの系統科学に近づいてゆくものと批判し、特殊地理学をこそ地理学の本体とすべきだと強調した。ハーツホーンは地誌学派の流れを汲みながらもこれらの極端な主張にくみすることなく、地理学を構成する二大部門は、それぞれ異る方法による地理的知識の体系化の結果であるとしている。そして通論的研究の際も、複合的地域の要素としての単一現象が、いかにして地域的差異を現わすかの理由を考究することにより、また地誌的研究も前者の理論をとりいれて諸事象の相関による地域の成立を理解することにより、かような二元的対立を解消し得ると説くのである。これは現在の二大部門の交叉的並立を認めつつ、それらによつて成る地理学の全体系をもつてその本体と見なすものといえよう。

しかしながら地理学の本質を土地的区域科学であり、場所的統合科学であると考え、これに主客統合理論の追求と実践科学方策の研究とを加えようとするものにとつては、近代地理学の体系がたとえ三世紀にわたる慣用の経歴をもつにせよ、斯学の本質を盛るにふさわしい本体的部門をその中に見出すことはできない。たとえば自然地理学や人文地理学はたしかに近代科学の本領たる理論研究に蕩進する点は肯かれるとしても、系統科学と同様に単一動力の方向を把握する単一理論に傾くきらいがあり、また地人相関の複合理論をとりあげても、地物自然力や社会自然力の交錯よりなる因果的必然理法に終るものが多い。これに反して地誌学は地域についての多面的・総括的記述を行う点は良しとしても、それを本体とするにはあまりにも主体性と理論性が欠除するとの批難は免れ得ない。近代の地誌学は非科学的な中世地誌を脱却してその科学性を高めようとするあまり、精確な客観的知識を編成しようと努めたのであるが、その結果は全く死せる地域の叙述に止つて、血の通う主体的土地を描写するには至らなかつた。また理論の欠除という指摘に応えるためには、本来地誌研究の埒外に属する地域の理論的説明に乗り出したものの、もとより新たな

具体理論をうちだすすべもなく、僅かに一般地理学からの理論の借用をもつて、その表面を糊塗するに過ぎなかつた。したがつて一般地理学或は特殊地理学の各部門はもちろんのこと、両者を合せた地理学の全体系をもつてしても、なお現代地理学の要求を満す新研究を盛ることは出来ない。

近代地理学に対する学者の批判は一九三〇年代から現われたもので、それは対境面からも方法面からもとりあげられ、また共産圏内においても自由社会においても行われた。すなわちバンゼはつとに分析的・客観的な地理学へ強い論難の矢を放ち[30]、ハウスホーファーの一統は静態的・観照的な地理学に向つて攻撃の石を投じた[31]。またソ連でもこの頃はヘットナー学派の資本主義地理学への訣別を、学界の粛清を通して実現した時期である[32]。もつともこれらの批判には全体主義思想との結びつきからする多少の歪みも認められはするが、その中にはなお近代科学的地理学への不満が学史的発展として包含されている点は見逃されてはならない。さらにまた、戦後においては近代地理学への批判のみでなく、進んで現代の地理学を樹立しようとする意欲もすこぶる旺盛である。たとえば海陸の地理学に対する空の時代の地理学（Air Age Geography）、領土争奪の地理学に対する平和の地理学（Geopacifics）、分析地理学に対する綜合地理学（Synthetic Geography）、局地的地理学に対する全地表的地理学（Global Geography）、観照的地理学に対する応用地理学（Applied Geography）などの登場はいずれもこの趨勢の現われといえよう[33]。

かように地理学においても、近代の転換期に際して、新時代の地理学を生み出そうとする試みが続々と発表されているのであつて、それらのものは未だ業績も十分でなく、体系も不備ではあるけれども、たしかに地理学の新たな部門を築き上げてゆくべき性質をもつていると考えられる。いまこの趨勢にそうてその内容を集積し、その方法を整備してゆけば、そこにはこれまでの通論や地誌と異つた部門が形成されるわけである。すなわち大小の生活体の場所的土地について、その成立の事記と理論を綜合的に行い、進んでは土地改造の実践的研究に及ぶもので、これをかりに綜合地理学と呼ぶならば、その中で最も重要な地位を占めるに至るのは、世界地理学と邦国地理学とであろう。世界地理学という著述はこれまでにもみられるが、その内容は

地表に関する一般地理学と大陸地誌との概括にすぎない。[14]ここで問題とするのはそれとは異つて、具体的な世界生活の場所としての地表を研究するものである。もつとも世界生活は世界国家に到達するにはなお遼遠な前途をもつので、それは十分に主体的な地理学とはなり得ないが、邦国地理学の場合は近代の政治地理学や国家地誌とは別に、国土建設を包含する主体性の強い綜合地理学の樹立が可能となつてくる。さらに世界地理学や邦国地理学の下部には、地方自治体の生活地域を対境とする郷土地理学や各種の派生団体及び家族の生活地域をとりあげる箇域地理学もつくられるが、これらもまた主体的綜合的に研究することによつて綜合地理学に加えられるのである。

これらの綜合地理学についてはその性質が一般地理学や特殊地理学と異る関係上、その成長につれて自ら地理学体系におけるその位置が問題になつて来よう。顧みればウァレーニウス以来堅持されていた斯学の体系もやはり近代思想の産物にすぎないといえるのであつて、その中の二大部門を始めとする多数の小部門は、いずれも分枝の役割をもつに止り、本幹に当る部門はどこにもこれを見出すことは出来ない。そしてまた大小の分枝を概括する名ばかりの全地理学も決して一本の本幹に代り得ないのである。したがつて現代科学の中に座を占めようとする地理学としては、やがてこの体系に変革を加え、本幹的な綜合地理学を中軸とし、一般地理学と特殊地理学という二大分枝をこれから派出させ、さらにそれぞれに細かな枝葉を繁らせてゆくべきであろう。[15]

（昭和三五年四月二八日）

① エラトステネスの「地理学」は失われてしまつたがストラボンの地理書の中にその引用がみられる。これについては次の著書がある。

Bunbury, E. H.: A History of Ancient Geography, 2nd ed. 1883.

Jones, H. C.: The Geography of Strabo, 1917–32.

織田武雄、『古代地理学史の研究』（昭三四）

② ウァレーニウスの『一般地理学』はラテン語で書かれたが（一六五〇年）、ニュートンがこれに改訂を加えて英訳本を出版した（一七三三年）。これについては小野鉄二『ウァレーニウスの地理学』（岩波講座総論昭六）。

③ カントの講義は一七五六年から一七九六年へかけてケーニヒスベルヒ大学で約四八学期間行われた。そのノートの出版ではRink版が権威ありとされている。ここでは東北大学図書館のSchubert, F. W. (hrsg.): Immanuel Kant's Schriften zur

Physischen Geographie, 1839. によった。

⑭ クルダーはカントによる思想上の感化は少いといわれるが、地理学的智識での影響は著しい。 Herder, J. G.: Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, 1784–87.

和辻哲郎『近代歴史哲学の先驅者』（昭二五）

⑮ Hettner, A.: Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und inre Methoden, 1927.

⑯ Hartshorne, R: The Nature of Geography, 1939.

（野村正七訳、ハーツホーン『地理学方法論』昭三二）

⑰ 一八九五年創刊の Geographische Zeitschrift に掲載された。一九二七年までの論文が上掲書におさめられたわけである。

⑱ Chorologische Wissenschaft.

⑲ Schlüter, O.: Die Ziele der Geographie des Menschen, 1906.

idem: Die Stellung der Geographie des Menschen in der erdkundlichen Wissenschaft, 1919.

⑳ Semple, E. C.: Influences of Geographic Environment, 1911.

㉑ Barrows, H. H.: Geography as Human Ecology, 1923.

㉒ chorographic science.

㉓ integrating science.

㉔ systematic (or general) geography, regional (or special) geography.

㉕ 人類学における地理学的方法の利用については

宮川善造「環境と文化領域」（『現代地理学講座』昭三二）

Wissler, C.: An Introduction to Social Anthropology. 1927.

Kroeber, A. L.: Cultural and Natural Areas of Native North America, 1947.

社会学への地域概念の導入については Odum, H. W. and Moore, H. E.: American Regionalism, 1938. Hallenbeck, W. C.: American Urban Community, 1951.

㉖ Windelband, W.: Geschichte und Naturwissenschaft, 1894.

Rickert, H.: Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, 1915. 田辺元『科学概論』（昭一五）、

㉗ Graf, O.: Vom Begriff der Geographie, 1925.

㉘ 分布の地理学や相関の地理学についてはハーツホーンの上掲書に詳述。

㉙ Richthofen, F. von: Vorlesungen über allgemeine Siedelungs und Verkehrsgeographie, 1908.

㉚ 野間三郎「オスカー・ペッシェル」（『京都帝国大学文学部地理学研究報告』第一冊）

㉛ ハーツホーンは米国の例を引いて原初景観、新生景観、文化景観の概念を提唱している。景観概念については Bürger, K.: Der Landschaftsbegriff, 1935 が詳しい。

㉜ Ratzel, F.: Anthropogeographie, 2822–91.

Huntington, E.: Civilization and Climate, 1915,

Tatham, G.: Environmentalism and Possiblism (Geography in the 20 th Century, 1953.)

㉓ 飯間三郎・堀川侃「環境論」（『地理学本質論』昭三〇）、オムスキー（小堀・吉成訳）『ソ同盟の自然改造』（昭二七）。

㉔ 地理学の対象を環境地域とする説、富田芳郎「地理学の在り方」（『東北地理』一ノ一）。

㉕ Ratzel, F.: Politische Geographie 1897 を始め、Maul, O. その他の同名の著書が多い。戦後の代表なものには Pearcy, G. E. and Fifield, R. H.: Political Geography 1952.

㉖ Forde, C. D.: Habitat, Economy and Society, 1952.

㉗ 差別性と相似性とについては James, R. E, and Jones, C. F. (ed.): American Geography, Inventory and Prospect, 1954.

㉘ la Blache, P. V. de: Principe de Géographie Humaine, 1922.

㉙ 宮川善造「実用的地理学の科学性」（『富田芳郎先生退官記念論文集』昭三四）及び「地理学の科学性」（『人文地理』七ノ五）。

㉚ E. Banse: Die Geographie und ihre Problem, 1932.
idem: Geographie und Wehrwille, 1934.

㉛ Haushofer, K.: Baustein zur Geopolilik, 1928.

㉜ Balzak, Vasyutin and Harris: Economic Geography of USSR, 1949.

レニングラード大学経済地理学研究所（橋本訳）『経済地理学の方法論』（昭九）。

ワシチーチン、コワレフスキー（橋本訳）『経済地理学の諸問題』（昭一一）。

㉝ Chamberlain, J. F.: Air Age Geography and Society, 1952.

Packard, L. O.: Our Air-age World, 1954.

Renner, G. T.: Air Age Geography, 1943.

Talor, G.: Geopolitics and Geopacifics. (Geography in the 20 th Cenlury), 1953.

Ackermann, E.: Geographic Training, Wartime Research and Immediate Professional Objectives, AAAG 35, 1945.

Renner, G. T. and others: Global Geography, 1951.

Stamp, L. D.: Some Aspects of Applied Geography (The Changing World), 1956.

idem: Applied Geography, 1960.

㉞ Shanahan, E. W.: A Modern World Geography, 1933.

㉟ この論説は最近数年間に東北地理学会において発表した「地理学の対象とその実在性」、「地理学における場所の意義」、「地理学の本質」などをまとめたものである。

## Nature of Geography

by

Zenzô Miyagawa

Hartshorne's theory, which regards geography as a regional and synthetic science, is sure to be in the main current of the modern geography, but it cannot be in the main current of the modern geography, but it cannot be said to grasp the full nature of geography, with its one-sided emphasis of researching method.

As compared with this, that we define the researching object of geography as land, a place of human life, enables us to offer geography as a land and place science from its objective emphasis.

Then, in modern geography, thinking the method and object together in geography, we are due to say that its nature consists of a regional science in land and a synthetic science in place. The core of geography that has the above-mentioned nature is now in course of construction, with a great change in its modern system.

## On *Amaribe* 余戸

by

Naoyoshi Nino

In spite of some contrary opinions, there is a generally accepted opinion that *Amaribe* 余戸 means *Ri* 里 of ten families, according to the *Koryôirijô* 戸令為里条. *Izumofudoki* 出雲風土記 or other sources, however, denoted that *Amaribe* 余戸 was neither *Gô* 郷 *Ri* 里 of *Ryôjô* 令条 nor *Kozato* 里, but a village without usual *Gôri* 郷里.

Researching villages of this character, we understand that *Amaribe* 余戸 means '*Jun Riko-Shûdan*' 準里戸集団 or a group of semi-*Riko* 里戸, according to the explanation of *Shûgekoki* 集解古記 on *Koryôirijô* 戸令為里条. Also in the geographical condition *Amaribe* situated only in sheer valleys, or in remote regions probably untrodden by men.